

経済的自由主義の帰趨（要旨）

末永 茂（いわき明星大学）

<報告要点>

- ・局面的集積と総構成的接近の課題 ・仮説と検証・自然科学の方法的課題との関連
- ・経済学説と分析方法の転換・古典学説の政策的還元
- ・経済的自由主義と均衡主義新古典派理論への収斂
- ・自由主義と保護主義の議論、及び社会関係資本概念の定律
- ・国家介入の振幅（市場と非市場のせめぎ合い=図参照）
- ・結論として；数量的科学概念の限界を超えて

<報告視点>

本報告では、近代科学の典型的な研究方法との関連に於いて、経済学の主要政策である「自由主義」と「保護主義」を巡る論争の意義を考える。そして、経済政策は固定的な政策集団の一方的教義ではなく、専ら国家による「政策介入の均衡過程」として捉えたい。一般的に政策分析は「ミクロ的アプローチ」と「マクロ的アプローチ」の大別二つの方法があるが、ここではミクロの部分的分析を積み上げて全体像に迫る方法を「局面集積法」とし、全体構成から総体及び具体的な部分分析に下方する方法を「総構成的接近法」とした。その二つの分析法による近似的接近法の限界と特徴を明らかにする。

市場と非市場の関係（ヒックス説の図式化）

